郷土を知る

昔々のそお市

むかしむかし

第30回

埋甕

うめがめ

生涯学習課 文化財係 ☎ 0986-76-8873

当時の人が、何かの目的で地中に道具を埋めて保管する埋納遺構（デポ）を以前紹介しましたが、発掘調査では完形の土器を意図的に埋めた、埋甕（うめがめ）というものもまれに出土します。埋設土器（まいせつどき）とも呼ばれ、在地の深鉢型土器を正位で埋め、うすい板石や浅鉢状の土器でフタをするもの、全くフタをしないものなどがあります。

土器にはススやオコゲが残り、日常で使用していた物を転用した様子がうかがえ、土器の下位に意図的に孔（あな）が穿たれているものもあります。

国内では縄文時代中期ごろから出現し、南九州では縄文時代後・晩期のものがやや目立ちます。埋甕が出土する場所は、住居の出入り口付近や住居周辺といった、人通りが多く、生活に極めて近い地点といった特徴があります。

土器を埋める意図や内容物については古くから研究されており、大切な品を納めていた貯蔵用の土器説、胎児や幼児を埋葬した骨壺説、お産にともなう胞衣（えな）（胎盤（たいばん））を納めた説があります。この説を裏付けるように、乳幼児の人骨が納められていたものや、土器に入っていた土の化学分析から、胞衣に由来する脂肪酸（しぼうさん）が検出された例があります。

また民俗例では、遺骨を住居の入口に埋めて新たな誕生や再生を祈った風習や、埋めた胞衣を家主がまたぐことにより、健康で父親を敬う子が育つと言った伝承が残っています。

平成26年度に発掘調査が行われた末吉町諏訪方胡摩の中尾段遺跡では、5基の埋甕が出土しました。縄文時代晩期の入佐式土器（いりさしきどき）の深鉢を利用しており、やや時期が新しいものは、同じく入佐式土器の浅鉢でフタをしているものもありました。全て遺物包含層からの出土で、気になる中身ですが……残念ながら遺物は無く、少量の炭化物が混ざる土が入っているのみでした。何を納めて埋めたものだったのでしょうか？

中尾段遺跡出土の埋甕

実物は曽於市埋蔵文化センターに展示

【アクセス】大隅町月野1946番地1